

hap·py

→ go

→ luck·y

【ハッピー・ゴー・ラッキー】

形 〈人の行動が〉のんきな、気楽な。

名 10代におくるブックガイド。

はぴ

12

号

2011年4月発行

【編集・発行】

さいたま市立中央図書館

さいたま市浦和区

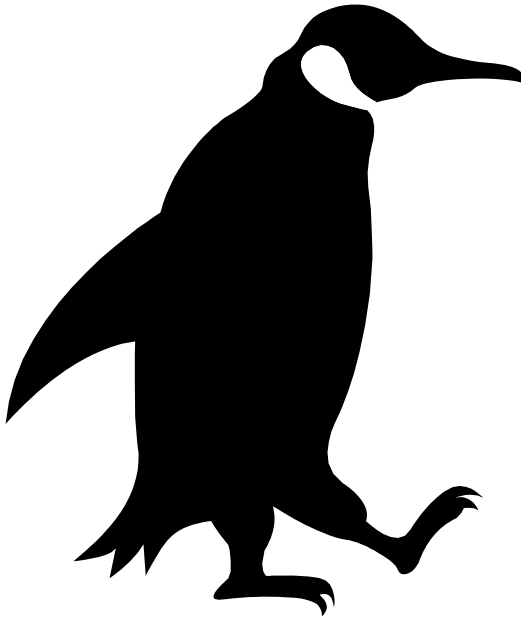
東高砂町 11-1

TEL 048-871-2100

FAX 048-884-5500

HP <http://www.lib.city.saitama.jp/>

携帯HP



イキモノ
生き物 ヲ 読ム



『動物の死は、かなしい?』

あべ弘士作 河出書房新社 2010年

『あらしのよるに』シリーズを描いた絵本作家のあべさんは、かつて旭山動物園の飼育係でした。そこで彼は生きているウサギをライオンの部屋に入れる「生きエサ」や、ヘビの補食行動を実際にお客さんに見せる「もぐもぐタイム」などの仕事を通して、動物の生と死を目の当たりにしてきました。

動物の命と向き合ってきた飼育係、そして絵描きとして歩んできた作者の半生を振り返ります。



『ごきげんな裏階段』

佐藤多佳子作 新潮文庫 2009年

みつばコーポラスというアパートの裏階段は、めったに人がこないきみわるい場所だ。実はそこには、タマネギを食べる猫や笛を吹くクモ、煙が好きなおばけなど言葉を話す不思議な生き物がいる。そんな彼らと、アパートの子どもたちが出会い、さらにその家族も巻きこんで、いっふう変わった交流が始まる。

ちょっと困り者だけどなぜか憎めない、不思議な生き物たちとの会話がユーモラスな物語。



『虫はごちそう!』

野中健一作 小峰書店 2009年

「虫を食べる」ということは食文化のひとつです。日本人も昔からイナゴやはちの子を食べてきました。一方で、「コオロギを食べる」と聞くと、みなさん驚きませんか?でも世界にはコオロギをごちそうとして食べる人々もいるのです。

この本は、多くのイラストや写真を使って世界の国々の虫料理を紹介しています。ごちそうの考え方にはいろいろなものがあることを実感させられる1冊です。

巻末には「昆虫食に親しむためのガイド」付き。



『駆けぬけて、テッサ!』

K. M. ペイトン作 山内智恵子訳 徳間書店 2003年

幼い頃から馬と共に暮らしてきたテッサは、両親の離婚により愛馬アカリと引き離され、故郷アイルランドからイギリスに渡った。その後テッサは母の再婚相手である男に反発し、寄宿学校に入れられる。やがて何度も問題を起こして退学処分になり、近くの牧場に働きに出されてしまう。そこで出会った不恰好な馬ピエロがアカリの子だと知ったテッサは、ピエロに騎乗しイギリス最大の障害レース「グランド・ナショナル」に出るという夢を抱く。



『グリックの冒険』

斎藤惇夫作 岩波少年文庫 2000年

シマリスのグリックは、人間の家で飼われていた。ある日、伝書バトのビッポーが舞い降りてきて、「君の仲間が暮らす場所は、ずっと北の大きな森だ」と言う。

森へ行く決心をしたグリックは家を抜け出し、ドブネズミのガンバと出会う。そして、ガンバに導かれた動物園で、めすの“のんのん”と一緒に。旅は困難を極めた。2ひきは天敵のノスリやフクロウから逃れ、雪山を越えて、仲間の待つ北の森を目指す。



『くまのパディントン』

マイケル・ポンド作 松岡享子訳 福音館書店 1980年

ブラウン夫妻は娘のジュディを迎えに行った駅のプラットホームで、広いつばのついた奇妙な帽子をかぶった小さな茶色いクマと出会う。

夫妻はペルーからやってきたと話す礼儀正しいそのクマに「パディントン」と名前をつけ、家に連れて帰ることにした。

お茶を飲めば体中がクリームでベタベタ、お風呂に入れば水があふれ、デパートに行けば人だかりができる。

パディントンの周りで起こる愉快な騒動を書いたシリーズの第1作。



『ジェニ』

ポール・ギャリコ作 古沢安二郎訳 新潮文庫 2001年

「ばあや!ぼくピーターだよ」8歳のピーター少年は大声で叫んだが、ばあやに外にほうり捨てられた。トラックにぶつかった衝撃で、ピーターは白い猫になってしまったのだ。

猫になったピーターにとって、人間は冷たい生き物で、街は危険がいっぱいだった。ようやく見つけた寝場所でやさしい雌猫・ジェニと出会い、身づくろいの仕方やミルクの飲み方など猫の作法を教わる。やがて仲良くなった2匹は旅に出かける…。

猫好きの作者が贈る1冊。



『パンダの飼い方』

猛獣・珍獣・和み獣と暮らしてみたい! 白輪剛史作 PHP 研究所 2010年

パンダ、ライオン、ペンギン、そんな動物園の人気者を実際に買うことは出来るのか?爬虫類や動物の輸入・卸売業を営む作者が、入手難易度・飼育難易度・なつきやすさ・飼育下での寿命などにランクをつけて解説する。

見た目に似合わず意外と凶暴なレッサーパンダ、ライオンも倒してしまうキリンのキック力、優雅な外見なのに実はとっても臭いフラミンゴ、シロナガスクジラのエサ代は何と年間5億円以上!誰かに教えたくない動物の豆知識も満載。



『ぼくの鳥の巣絵日記』

鈴木まもる作・絵 偕成社 2005年

山で暮らし始めたぼくは、ある日、雛が巣立って使われなくなった鳥の巣を見つけた。どんな鳥が作った巣なのか調べるうちに、鳥の種類や住環境によって、さまざまな巣の形があることを知った。

今でも家の周りには、春から夏にかけて、ヤマガラやエナガなど数十の鳥が子育てをしている。

四季折々に見られる鳥の巣作りから巣立ちまでを、観察に基づいて描いた本。

*『バサラ山スケッチ通信』(小峰書店)も読んでみて!





『ウミウシ』

中野理枝作 豊田直之写真
福音館書店 2009年



◆ 海中を彩る生き物 ◇

海底をゆっくり這っているウミウシ。その体はカラフルだ。巻き貝の仲間だが、ほとんどのウミウシが貝殻を持たずに暮らしている。ではどのように他の生き物から身を守っているのか…。

様々な色かたちをしたウミウシの生態を鮮やかな写真で紹介した1冊。

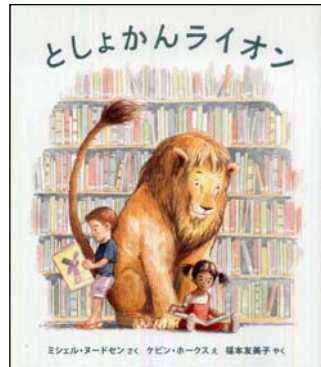


◆ 図書館へようこそ！ ◇

もしも、図書館にライオンがやってきたら…。

この本は、図書館でおはなしを聞くことが大好きになったライオンが、みんなに受け入れられるまでを描いています。

みなさんも、図書館で新しい出会いをしてみたいはいかがでしょうか？図書館はいろいろな本と一緒に、みなさんをお待ちしていますよ！



『としょかんライオン』

ミシェル・ヌードセン作
ケビン・ホークス絵 福本友美子訳
岩崎書店 2007年

今回は、生き物の本を11冊取り上げました。ペットと同じように、「はび」もかわいがってください！

次回
予告

13号（7月発行）のテーマは「部活」



「WEB版はび」 図書館HP「10代のページ」からGo!

このブックガイドは2000部作成し、1部あたりの印刷経費は3円（概算）です。